

沖縄の代名詞「ツヤー」の源流小考

野原 三義

ツヤーは、沖縄の那覇方言では同年またはそれ以下の人に対して使う八君、お前Vにあたる二人称代名詞である。罵倒にも使うから八貴様Vにもあたるといえよう。

沖縄方言ではごく一般的な語で、どこでも通用する。ただし本島北端の国頭村の一部ではウラを使うところもある。このウラは、奄美の与論方言や沖永良部方言のウラに連なっている（中本正智『図説琉球語辞典』）。

ツヤーの語源であるが、一般にはウラが変化して出来た、ということになっている。

伊波普猷は『語音翻訳』にウラズマフィチュと読めるところがあり、八貴方は何処の人Vの意とし、いまから約五百年以前の南島標準語である首里のことはを写したものとす（『南島方言史攷』）。つまり現在のツヤー以前にウラが使われていた証拠である。これがツヤーがウラから変化してできたものとする考えの一つの支えになっている。

しかし以前ウラが使われていたからといって、それが変化してツヤーになったとは言えない。たとえば「やらさもりくすくの神」（一五五四年那覇垣花に建つ）には「いつきやめむちよくかたくかくとするへし」八何時までも強く堅く格護するべしVとある。きやめは八までVに当る助詞であるが、現在では那覇はおろか沖縄本島どこへ行っても聞くことはできない。現在はマディが広く使われてい

るのである。以前きやめが使われていたからといって、それが次第に形を変じてマディになったとする人はあるまい。そして沖繩から南西三百キロの宮古方言では、現在もきやめ系の語が盛んに使われているのである。

ところで、従来の沖繩人称代名詞の研究ではほとんど扱われなかったものに、イー、イガの系統のものがある。仲宗根政善『沖繩今帰仁方言辞典』にはイーハ君ら、お前たちVが見え、類義語として他でもよく使われるイッターハ君ら、お前たちVもあるが、これは新しく感じるとする。宮良当壮『探訪南島語彙稿』には、伊江島でもイガお前、お前達Vとして使われているとある。私も中部の宜野湾市我如古の九十歳余の老人が、イーを使っているのを聞いたことがある。南部の玉城村奥武方言では、二人称卑称としてイガ、複数にイガターを使うそうである。

宜野湾市真志喜、喜友名、野嵩などではイガルーハわれわれVがよく使われている。具志川市具志川の人たちも、自分たちの村のこの特徴としてイガルーを自慢している。このことは、さらに石川市や与勝半島にも分布しているようである。宜野湾市大山では、イガとかイガナーとかいう。ひよっとすると糸満のンガターハ私たちVは、イガターから変化したものかもしれない。

与那城村宮城島上原方言では、二人称の尊称にイガモーを使ってゐる。遠く宮古諸島の伊良部町伊良部方言のイティハ君たちVのイも、おそらくこれらと関係があろう。

今帰仁ではイーにかわってイッターが侵入しているようであるが、伊江島ではイにかわって近ごろはッターが使われているらしい。そして我如古のイーはまさに消えかかっている。六、七十代の

人はもはや知らないという。

要するに最近はずゃーハ君Vやイッターハ君らVによって全島が統一されつつあるが、まだそここにイーやイの痕跡がわずかながら認められる、ということになる。

奥武のイガは卑称になっているが、普通の用法を新来のイッターに奪われて地位が下落したのであろう。宜野湾などのイガルーはハわれわれVの意味となっているが、これもいまやワッターハわれVに制圧されかかっており、水面下でうごめいている感じである。宮城島上原方言のイガモーは、普通のイッターによって、ここでは地位を押し上げられたようである。

宜野湾市大山のイガ、イガナーは、同僚の大山出身の宮城邦治氏によれば、両語は大体似た意味、会話の内容次第でイガナーンマガル ヤンナーハあなたがたの孫ですかV、イガナーガ クーサイニハわたしたちが小さいときにVのように、相手側のことを言ったり話手側のことを言ったりするという。標準的なイッター、ワッターもあるが、このイガ、イガナーは非常に friendly な感じで、反射代名詞的なところ、inclusive, exclusive の別に関係ありそうでもあるという。存外、大山の人称代名詞の用法は、沖繩における古相を窺わせる鍵かもしれない。

すでに述べたように、一般にはウラがツヤーに変化したとされる。しかし以上のように各地を見渡すと、元来イー、イガ系の代名詞が分布しており、そこにツヤーやイッターが勢力を伸ばして来て、それらの共存の中で卑称や尊称への特定が生じ、排他的用法や人称に変化が起こったように見えてくる。またそれは、単なる交替や変化ではなく、たとえば自他の未分化な状態から脱却しようとする

る社会的要請が背景にあったのではないか、などと考えさせられたりもする。

イガには、実は並行的なウガもある。限られた地点でしか聞くことができず、多くは二人称として使われている。伊平屋のウガ、伊是名の諸見、伊江島西江前のウガーは尊称である。これに対して久米島仲里村阿嘉では卑称となっている。また旧久志村安部のウガだけは八わたしたちVの意味になっている。

文献では『おもろさうし』におかが四例みえ、二例は尊称、二例は卑称である。『組踊』のおが、おが、おが、おがはすべて卑称となっている。

イー、イガの場合はガの付かないイーがあるが、ウガに対するウーやウがあるかどうか、明らかでない。ともあれウガも中央で古く使われていたが、いまは周辺部でしか見られない、ということになる。なお、琉球諸島に広く分布するウラは、先島のツヴァーなどを合めて、ウガと同一の群と見ることができる。そして共通部分のウは、古くはオに溯るのかもしれない。

では問題のツチャーは、どのように発達してきたのであろうか。私にはイガを源とみる。

ʔiga > ʔiʔa > ʔia > ʔia:

のような経路をたどったと考えるのである。こう考えるほうが、ウラからの変化より自然ではなからうか。意味の変容はすでに各地の例を見てきたように、代名詞にはありがちなことといえよう。

中央でイガから変化したツチャーは、ウラやウガを庄倒して、中南部さらには北部、奄美とその勢力を伸ばしていった。そしてその圧力の前に、同源のイーやイガも、その意味用法の変化を強いられた

ものと思われる。

文献は上代語代名詞イの存在を教えている。「伊賀^い作り仕へ奉れる大殿の内には……」(『古事記』大系本157ペ)、^い「汝が根」(『日本書紀』142ペ)、「儻^いが身命」(同253ペ)は、いずれも二人称の卑称のようである。「時代別国語大辞典」の「…イは反射指示をあらわすものであろうとする説明もある……」は、宜野湾市大山方言を思い出させてる。

伊江島のツラーがウラからの変化というのはいかにもとうなずける。しかしツチャーもウラから変化したとする説にはどうも納得できずにいて、とうとうこんな考えをまとめることとなった。御批判を得たい。

— 沖縄国際大学教授 —
(昭和五十九年一月十八日 受理)